

降誕前第9主日礼拝説教 「この地の人々と共に」

日本基督教団石神井教会 2016年10月23日

【旧約聖書日課】 箴言 8章1、22～31節

1 知恵が呼びかけ、英知が声をあげているではないか。

22 主は、その道の初めにわたしを造られた。いにしへの御業になお、先立って。

23 永遠の昔、わたしは祝列されていた。太初、大地に先立って。

24 わたしは生み出されていた、深淵も水のみなきる源も、まだ存在しないとき。

25 山々の基も据えられてはおらず、丘もなかったが、わたしは生み出されていた。

26 大地も野も、地上の最初の塵も、まだ造られていなかった。

27 わたしはそこにいた、主が天をその位置に備え、

深淵の面に輪を描いて境界とされたとき

28 主が上から雲に力をもたせ、深淵の源に勢いを与えられたとき

29 この原始の海に境界を定め、水が岸を越えないようにし、大地の基を定められたとき。

30 御もとにあって、わたしは巧みな者となり

日々、主を楽しませる者となって、絶えず主の御前で樂を奏し

31 主の造られたこの地上の人々と共に樂を奏し、人の子らと共に楽しむ。

【使徒書日課】 ヨハネの黙示録 21章1～4、22～27節

1 わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。2 更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。3 そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、4 彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」

22 わたしは、都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが都の神殿だからである。23 この都には、それを照らす太陽も月も、必要でない。神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。24 諸国の民は、都の光の中を歩き、地上の王たちは、自分たちの栄光を携えて、都に来る。25 都の門は、一日中決して閉ざされない。そこには夜がないからである。26 人々は、諸国の民の栄光と誉れとを携えて都に来る。27 しかし、汚れた者、忌まわしいことと偽りを行う者はだれ一人、決して都に入れない。小羊の命の書に名が書いてある者だけが入れられる。

【福音書日課】 マタイによる福音書 10章28～33節

26 「人々を恐れてはならない。覆われているもので隠されていないものもなく、隠されているもので知られずに済むものはないからである。27 わたしが暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい。」

28 体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。29 二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。30 あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。31 だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」

32 「だから、だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は、わたしも天の父の前で、その人をわたしの仲間であると言い表す。33 しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも天の父の前で、その人を知らないと言う。」

新しい天と新しい地

先主日、わたしたちの教会は、今年度の「在天会員記念礼拝」と「墓前礼拝」を執り行いました。初代牧師・石井忠善先生の逝去 50 周年を記念する会も併せて行いましたので、記念礼拝にはこの礼拝堂がほとんど満席になるほどの方々がお集まりくださいました。もっとも、最前列にはどなたも座っていらっしやらなかったもので、まだ席に余裕があったというのが事実です。さらに、来年の「在天会員記念礼拝」には石井牧師の関係者はいらっしやらないでしょうから、相当の空席が見込まれる。けれども、わたしは皆さんにお願いしたいのです。在天会員記念礼拝には、毎年、礼拝堂が満席になるように、関係者にご案内をしていただきたい。ことに、かつて教会員であった方のご遺族で信者ではない方々が、ひとりでも多く、せめてこの日だけは礼拝においていただけるように、祈り願っていただきたい。「在天会員記念礼拝」は、一年の教会のカレンダーの中でも、特別な一日だからです。何よりも、信者と信者でない方々とを結びつけることができる礼拝だからです。

わたしどもは、今回初めて、石神井教会の在天会員記念礼拝に共にあずかりました。昨年までの記念礼拝の様子をうかがうと、とてもシンプルで通常とほとんど変わらない礼拝だったということでしたので、どうしようかと思っていたのですが、役員会で相談させていただいて、在天会員名簿をおぼえて記念の祈りをささげるときを加えさせていただきました。また、讚美歌も、記念礼拝の趣旨に沿ったものを選ばせていただきました。もしかすると、皆さんは、先週の礼拝で初めて歌ったという讚美歌がおありだったのではないのでしょうか。

石神井教会ではされていないということだったので、今回もしませんでした。多くの教会では、礼拝の中で記念される方々の「名簿」が読み上げられます。前任地の教会では、400 人近い「名簿」を読み上げていましたので、それだけで 20 分ほどかかっていました。それでも、その日のために集まれた皆さんは、配られた「名簿」に目を遣りながら、じっと読み上げられるお名前に耳を傾けていらっしやったのが印象的でした。ことに、信者ではない関係遺族の方々が、その礼拝の中でご自分のすでに亡くなられたご家族の名前が読み上げられることを、大切なこととして受けとめてくださっていたのです。

先週の在天会員記念礼拝で、説教者としてお迎えした大宮溥牧師が、繰り返し、「天にある民と地上の民が一つになって神の前に集い」ということをお語りくださっていました。教会の礼拝は、いつでもそうなのですが、ことに在天会員記念礼拝では、そのことがはっきりと告げられるのです。わたしたちがそのことを信じて礼拝にあずかるというだけではなく、その日だけおいでくださる信者ではないご遺族の方々に対しても、そのことがはっきりと示される。

むしろ、こういうことかもしれません。天上にある教会と地上の教会が一つに結びついていると、このことをはっきりと告げるときにこそ、わたしたち信者とされた者は、いまだ信者ではない方々と、同じ地平に立ち、結び合わされる手がかかりを与えられるのです。

門は決して閉ざされない

ある方から、こんなことを言われました。「日曜日の午前中、ちょうど、牧師が説教に立つ時間になると、聖壇の上に開いた天窓から光が射し込んで、説教者を照らすんですよ」。自分がここに立っていると、それがどのような様子なのか分かりません。それは、説教者を照らして、わたしのように見栄えのしない者でも、少しは厳かに見えるようにしてくれているのでしょうか。確かに、この聖壇の上に開いた天窓は、ただの明かり取りではないでしょう。この天窓は、わたしたちのこの礼拝堂が、天上の礼拝堂、神の御前に遍く広がる礼拝者の群れにつながっていることを思い起こさせるものです。天上で繰り広げられる天使や聖徒らの礼拝の荘厳で神の栄光にうち満ちたその様が、この地上の教会の礼拝堂にまで及んで、投影されている。ことに、天で神の御前に催される大宴会の食卓の縁が、この地上の教会の聖餐の食卓にまで伸びてきている。そのことを、わたしたちは、この天窓に助けられて、ここで礼拝に集うたびに思い起こすことができるのです。

黙示録の御言葉を書いたヨハネは、パトモス島という島に幽閉されているとき、主の日を迎えて密やかに礼拝をささげている中で、幻を示されました。恐らく、一人か数人で、閉ざされた部屋に閉じ込められていたのでしょう。小さな明かり窓があるだけだったかもしれません。そのようなところで、本当に寂しい礼拝を献げている中で、幻を示され、天上の礼拝へと引き上げられていったのです。

わたしたちも、地上にあって、たとえ地上の礼拝が貧しいものであったとしても、ヨハネのように天上の礼拝を幻として見ることができるでしょう。ヨハネが明かり窓を通して天上の礼拝へと引き上げられたように、わたしたちも天窓一つを通して、間違いなく天上の礼拝へと引き上げていただくことができます。

けれども、わたしたちは、ここで礼拝にあずかるとき、ただ、そのような天上の礼拝にあずかる神秘体験を願っているというわけではないのです。むしろ、礼拝を通して、天上の礼拝の幻をも見せていただきながら、その天上の礼拝が、今や地上に立ち現れようとしている現実を見る者とされていく。地上の礼拝が、天上の礼拝に取って代わられていくのです。

ヨハネが、天に上げられて幻を見せられた末に目の当たりにしたのは、すべてのことが新しくされる現実です。天上の礼拝にあずかることを通して、ヨハネは、「最初の天と最初の地」が過ぎ去り、「新しい天と新しい地」が現れるのを見たのです。新しい「聖なる都」が、神のもとを離れ、天から下って来たのです。その天から下って来た新しい聖なる都に、全能者である主なる神と、小羊であるキリストがいらっしゃるのです。天にあった神の国が、地上に現れたのです。

わたしたちが、主の日の礼拝ごとに見ているのは、この現実です。地上にあった古い教会は、天から下ってきた新しい教会に取って代われ、神の栄光が新たに光を増すのです。ここにこそ、わたしたちは、周囲の人々、家族や友を招き入れることができます。神とキリストがご臨在くださる天から与えられた教会に、すべての人が招かれるのです。その門は、決して閉ざされないのです。この新しくされた天からの教会には、夜がなく、神のご栄光だけがあるからです。

恐れて、恐れない

教会の皆さん。わたしたちは、在天会員記念礼拝を終えましたが、「一つ終えてやれやれ」という気分でしょうか。けれども、神は、このときにこそ、新しい光を照らして下さっています。天と地が結ばれ、神の御前で天使や聖徒らによって繰り広げられている天上の教会の営みが、今や、地上の教会の中で現実になろうとしているのです。普段おいでにならない、信者ではない関係ご遺族が先週の記念礼拝に多く招かれていたのは、神が、その現実をこの教会でも、あらためて起こして下さろうとしているからでしょう。

ヨハネは、「**都の門は、一日中決して閉ざされない**」と言いながら、「**小羊の命の書に名が書いてある者だけ**」が「**聖なる都**」に入れる、とも記しました。門は閉ざされていないのに、入れない者がいるというのでしょうか。それは、入ろうとしない者がいる、ということなのでしょう。

確かに、わたしたちは、教会の門戸を広く開放してみても、入って来られる方の少ない現実を目の当たりにします。11月にわたしたちが計画している「オープンチャーチ」も、どれだけの方々がいらして下さるものでしょうか。もしかすると、期待するほどではないかもしれない。教会の前を素通していく人たちのほうが、中まで入ってきて下さる人たちよりも、圧倒的に多いかもしれません。

その人たちは、もしかすると、天に置かれた「**小羊の命の書**」に名が書かれていないのかもしれませんが。けれども、書かれているかどうかを、わたしたちは知り得る立場にはないのです。ただ、名が書かれていることが確かな人たちのことは、知っています。洗礼を受けた人たちです。洗礼を受けた人たちを通して神の御前に立つ機会を与えられた人たちです。少なくとも、一度でも教会へと導かれ、礼拝にあずかる機会を与えられた人たちの名が、神の御心に憶えられ、小羊の命の書に記された方々の名であることを、わたしたちは信じてよい。

いいえ、その人たちに対して、わたしたちは、神から託された責任があるのです。その人たちが、天から与えられた教会の光の中を歩くことができるようにする責任です。その人たちが、神の栄光の中に立ち、小羊キリストの明かりに照らされて生きる者として整えられていくために、祈り、仕える責任です。

主イエスは、天の御父を恐れるべき方として憶えるように、お教えになられました。天の御父は、わたしたちの魂も体も滅ぼすことがおできになるお方です。でも、天の御父は、わたしたちの魂も体も、お滅ぼしになられないでしょう。それを望んではいらっしやらない。だから、主は言われるのです、「**だから、恐れな**」と。

この「恐れる必要のない、恐れるべきお方」が、今、天から与えられる教会のうちにおいで下さる神です。そのお方をお示し下さるのが、小羊キリストです。そのお方の栄光のもとに立ち、小羊の明かりに照らされて生きるべき道を示される。このお方は、今も、生きてお働きくださっているのです。わたしたちは、このお方を証しし、このお方のご臨在くださる教会に、その名を託された人々をお迎えするのです。それは、わたしたちに与えられた幸いな務めなのです。